

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經 (二)

若 杉 見 龍

一

草堂寺に羅什像が奉安されるに際し、同寺に羅什訳の經論を奉安しようという意見が興ったのも当然である。筆者は羅什訳といわれている經論すべてを草堂寺に奉安することがよいし、又同寺に付屬して、羅什及び羅什訳經論を對象とする研究所があつてよい程に思うのであるが、中国仏教界の現状と、草堂寺には老比丘尼がただ一人居住するのみ(昭和五十六年)で、羅什の墓所と寺を護持している実態とを考慮に入れて、せめて羅什訳の經典だけでも奉安した方がよいと主張した。しかし、そうは言つても、羅什訳の經論といへば、現在、資料として最も信頼されている『出三藏記集』卷二によつて見るに、妙法蓮華經・大智度論を初めとして、三五部・二九四卷という大部である。且つそれらの經典の大部分は大正藏經本等に見られるように羅什訳以外の經典とも合冊となつて印刷・製本され、羅什訳のみのものは僅かである。現在、日蓮宗寺院で仏前に供える卷子本の如き体裁のものがあれば好都合であるが、これも法華經を除いては殆ど望めないであろうし、折本の体裁をなしているものについても同様な状態であろう。結局はとりあえず、『妙法蓮華經』一部にしようということが、「草堂煙霧の会」の會長・玉沢妙法華寺貫主・松井大周師のご意見でまとまつた。しかし、『法華經』一部を奉納するにしても、一体どの版・どの体裁のものがよいである

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經 (若杉)

うか。体裁は訳出當時を偲ぶものとして卷子本がよいとしても、現行の『妙法華經』と羅什が訳した當時の『妙法華經』との間には文字に多少の異同があると想像される。書籍が書写によって流布した時代には止むを得ないことであろう。敦煌出土の『妙法華經』が羅什訳出當時の『妙法華經』に最も近いという意見もある。あれこれと理窟を述べていたら、草堂寺に納める『妙法華經』は遂にないことになる。これは啻に『法華經』のみならず、他の羅什訳についても大同少異であろう。羅什が訳出した時の經論がどこかで発見されれば別のことであるが、現在において、一文一句、訳出當時と全く同じ文字の經典を探索することは至難の業といつてよい。

そこで学問的嚴密さには少々欠けることはあつても、兎も角、日本で流布している『妙法華經』を奉安しようという事になった。そうは言つても、『法華經』の流布本にも色々な版もあり、又、写本も多い。窮余の拳句に考えられたのは宗祖ご所持の『妙法華經』である。宗祖ご所持本は、宗祖が佐渡法難の折にも持参せられ、又ご臨終の折にも枕頭に置かれたことは既に有名である。宗祖ご所持のいわゆる『注法華經』は故兜木正亨博士が春日版である事を指摘され、又複製もあるので草堂寺に奉安するには我々日蓮宗徒にとつて最もふさわしいということになり、立正安国会のご好意により、『注法華經』の複製本を草堂寺に納めた次第である。

二

宗祖ご所持の『注法華經』が春日版であるとすれば、春日版の『法華經』の複製でよいのであつて、何もわざわざ『注法華經』と限定しなくてもよい。『注法華經』は周知の如く、經文の行間に或は裏面に宗祖が行・草体の文字を以て注記されたものである。草堂寺といへば、日・中兩國国民のみならず、欧米人等の参詣もあることであろうし、彼

等が卒爾に之を拜した時は、落書きの多い本ぐらいにしか理解しない者もあるかというものである。しかし、特に『注法華經』と限定したのは、『注法華經』の裏面に宗祖がご聖筆で、『正法華經』の二十二の誤を指摘されていることである。これは宗祖が『妙法華經』と『正法華經』を比較されて、『正法華經』に「二十ノ二誤（欠落を含む）」のあることを明示されたものである。いうまでもなく、羅什の訳場においては先訳である竺法護の『正法華經』が参考とされた。『正法華經』を参考とした上で、『妙法華經』が訳出されたのであるから、宗祖は『妙法華經』こそが『正法華經』より勝れた翻譯であると理解されたのであろう。勿論、今日原典批判学立場からの立言は別であつて、それは全く別な問題として考察されなければならない。

三

さて、宗祖が『正法華經』における「二十二誤」というのは何か。以下、この点を考察してみたいと思う。

『注法華經』巻第一「方便品」の十如に該当する箇所裏に「二十二誤」として次の文が述べられている。『私集要文注法華經』（以下、私集本と略称する。版權者立正安国会、発行所本満寺、昭和四十五年刊）上・一四七頁―一四五頁に

正經善権品闕十如。闕開示悟入。応時品三十六千億仏。火宅五車。信樂品 天姓。菓草喻已後一長行偈頌。五百品 初長行偈頌。又同品 迦葉汝已知五百自在者等一行半偈闕。又繫珠喻闕。阿難羅云決品 新發意菩薩八万。菓王如来品誤。宝塔品有二誤。多宝如来説法花經誤。多宝本願聞名利益誤。以提婆品入宝塔品誤。安樂行品 四安樂行闕誤。法師品有二誤。眼千二百。余五千二誤。促經功用三十三天誤。不輕生報闕日月灯明。神力品中惣

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

一種。別出九種誤。藥王品有二誤。定力缺身不言燒臂誤。十誤譬喩一闕不具誤。妙音有二誤。妙音師弟長短不准誤。三十四身多有缺減誤。觀音品三十三身多闕不滿誤。同上

とある。これを『日蓮聖人註法華經』（加藤日源・加藤文淵編 昭和七年刊）上九十一頁と比較してみると、「從」とあるが、これを『日蓮聖人註法華經』（加藤日源・加藤文淵編 昭和七年刊）上九十一頁と比較してみると、「從」となっているが、これが「從」「促」の兩字に読まれているのである。川澄勲編『仏教古文書字典』によると、「從」を「從」と判読されているようである（同書五十四頁）。又、「促」とも判読されている（同書二百十四頁）。何れに読むのが正しいかは筆者の力に余ること、何れが正しいか判断いたしかねるが、「促」の字とした方が文意に合するようである（後述）から、以下、「促」の字としておく。

次に、宗祖が挙げられた右の文を品ごとに分類すると次の通りである。括弧の中は『妙法華經』（以下什訳と略称）の品名である。

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1 善権品（方便品） | 二 闕誤（以下「闕誤」の二字を略す） |
| 2 応時品（譬喩品） | 一一 |
| 3 信樂品（信解品） | 一一 |
| 4 藥草品（藥草喩品） | 一一 |
| 5 五百弟子決品（五百弟子受記品） | 三三 |
| 6 授阿難羅云決品（学無学人記品） | 一一 |
| 7 藥王如来品（法師品） | 一一 |

- | | | |
|----|-------------------|---|
| 8 | 七宝塔品 (見宝塔品) | 二 |
| 9 | 提婆品ヲ宝塔品ニ入ル誤 | 一 |
| 10 | 安(行)品 (安樂(行)品) | 一 |
| 11 | 歎法師品 (法師功德品) | 二 |
| 12 | 常被輕慢品 (常不輕菩薩品) | 一 |
| 13 | 如來神足行品 (如來神力品) | 一 |
| 14 | 藥王菩薩品 (藥王菩薩本事品) | 二 |
| 15 | 妙吼菩薩品 (妙音菩薩品) | 二 |
| 16 | 光世音普門品 (觀世音菩薩普門品) | 一 |

以上、『正法華經』(以下晉訳と略称)によって品名及び闕誤を数えると、十六品に亘って、二十四の闕誤が挙げられる。宗祖は「二十二誤」と言っておられるので、数が一致しないが、「藥草品」と、「五百弟子決品」の最初の一文とは什訳と比較すれば、付加された部分ということになるので、宗祖は「誤」の中には数えられなかったかも知れない。又「已上闕四」の語の意味は不明である。

『日蓮聖人註法華經』上 九十一頁の欄外に

祖語か。但し、此説出所未だ檢せず。又惺本には一より八までの番号を付せり。

と、編者は述べ、この「二十二誤」が祖語か否か疑っておられるのであるが、

「私集本」上 二百九十二頁には

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經(若杉)

正經第二 応時品 堪至無上正真之道

とあり、次の行には

偈頌云 迦葉沈吟住於聖惠

とある。前者は大正・九・七三・中に見られ、後者は大正・九・七四・上（但し、以乘沈吟 住於聖慧とある）に見られる。その他晋訳を引かれた箇所が数多く見られるので、宗祖が晋訳と什訳を対照せられたのは間違いない所である。しかし、上述の「二十二誤」の中に「提婆品ヲ宝塔品ニ入ル誤」として挙げられているのに、『注法華經』の「提婆達多品」には「正云 梵志品」（「私集本」下 五百十二頁）と書かれている。随って、宗祖は「提婆品」が「宝塔品」と直ちに連続している『正法華經』（例えば高麗版）と、「梵志品第十二」等と書かれた本（例えば宋本・宮本等）の両本を見られたかどうか不審である。

宗祖は「二十二誤」と述べられているが、什訳に見られない部分まで含めて数えれば、二十四条となることは既に述べた如くである。よって以下、一条ごと晋訳と什訳を比較して述べて見たい。そして、晋訳と什訳の対照は『梵文法華經写本集成』（以下、『写本』と略称）の巻末にある『漢訳法華經』が大変に便利であるから、同書の巻・頁を挙げ、『大正藏經』における出典箇所の註は必要以外、なるべく省略した。『写本』を見れば、大正藏經の巻・頁・段が指摘されているからである。

一 正經 善権品闕十如。（正經 善根品二十如ヲ闕ク）

晋訳に十如のないことは周知の事で、今更述べる程のことはないが、一応挙げてみよう。

什 訳

所謂諸法。如是相。如是性。如是体。如是力。如是作。如是因。如是縁。如是果。如是報。如是本末究竟等。

晋 訳

從何所來諸法自然。分別法貌衆相根本知法自然。

〔写本〕第二卷 二頁

二 闕開示悟入。(開示悟入ヲ闕ク)

この箇所は次の通りである。

什 訳

諸仏世尊。欲令衆生開仏知見使得清淨故。出現於世。欲示衆生^{イナレ}仏之見故。出現於世。欲入衆生悟仏知見故出現於世。欲令衆生入仏知見道故。出現於世。舍利弗。是為諸仏以一大事因縁故。出現於世。

晋 訳

以用衆生望想果心勸助此類出現于世。黎元望想希求仏慧出現於世。蒸庶望想如來宝決出現于世。以如來慧覺群生想出現于世。示寤民庶八正由路使除望想出現于世。以故当知。正覺所興悉為一證^{イニ}。

〔写本〕第二卷 九頁

三 応時品 三十六千億仏(応時品ニ三十六千億仏)

什 訳

我昔曾於二万億仏所。

晋 訳

三十二千億仏。

〔写本〕第三卷 四頁

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經(若杉)

である。「三十二千億仏」が『注法華經』に「三十六千億仏」とあるのは宗祖所覽本の誤か、或は示同の趣きであろう。

四 火宅五車（火宅ノ五車）

これは火宅の中の人数と、車の種類についてであろうか。

(i) 人数については

什 訳

一百二百乃至五百人。（中略）長者諸子。若十。二十。或至三十。

数百千人。（中略）長者有子。若十若二十。

晋 訳

（『写本』第三卷 十頁）

(ii) 車の種類については

什 訳

如此種種羊車。鹿車。牛車。今在門外。

（『写本』第三卷 十一頁）

晋 訳

当賜衆乘。象車。馬車。羊車。伎車。

とある。

五 信樂品天姓（信樂品ノ天姓）

ここでいう天姓についてはよく解らない。記してご示教を乞う。

六 葉草喩已後一長行偈頌。(葉草喩已後ニ一長行ト偈頌アリ)

これは什訳の葉草喩品の終った後、晋訳では更に「仏復告大迦葉」(大正・九・二〇・中)以下の文が続いていることをいうのである。(『写本』第四卷二十二頁——二十八頁参照)因みに『添品法華経』は什訳に「譬如日月」以下の文を付している。(大正・九・一五三・中——一五五・上)

七 五百品初長行偈頌(五百品ノ初メニ長行ト偈頌アリ)

これは晋訳の初め(大正・九・九四・下・十一行目)から偈の終り(大正九・九五・中)までを指すのであろう。(『写本』第六卷二〜四頁参照)

八 又同品迦葉汝已知五百自在者等一行半偈闕。(マタ同品ニ「迦葉汝已知五百自在者」等ノ一行半ノ偈ヲ闕ク)

これは什訳にある「迦葉汝已知 五百自在者 余諸声聞衆 亦当復如是 其不在此会 汝当為宣説」(大正・九・二八・下)の文が晋訳に闕けていることを指している。(『写本』第六卷 十頁 参照)

九 又繫珠喩闕(マタ繫珠ノ喩ヲ闕ク)

これは有名な繫珠の譬喩についてであるが、宗祖は晋訳に闕けていると述べておられるが、現行の晋訳には繫珠の譬喩は闕けていない。(大正・九・九七・中) (『写本』第六卷・十一頁参照)宗祖のご所覽本には闕けていたのであろうか。

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經(若杉)

十 阿難羅云決品。新發意菩薩八万。(阿難羅云決品ニ「新發意ノ菩薩八万アリ」ト)

これは什訳には「新發意菩薩八千人」とあるが晋訳には「新發意八万菩薩」とあり、この八千と八万の相違を指摘したものであろう。(『写本』第六卷 十六頁 参照)

十一 藥王如來品誤(藥王如來品ノ誤)

これは短文であつて、何の事かよく判らないが、前条において「八千」と「八万」の人数について問題とされているので、それに類同して考えれば、什訳に「於八十億劫」とあるが、晋訳には「若於十八億劫」とある数字に対する相違を述べられたものと理解してよいであらう。(『写本』第六卷 二十七頁 参照)

十二 宝塔品有二誤。多宝如來說法華經。(宝塔品ニ二ツノ誤リアリ。多宝如來『法華經』ヲ説ク)

これは晋訳に「為諸十方講說經法」(大正・九・一〇二・下)とあることを指したのであろうか。勿論、什訳には見当らない。(『写本』第七卷 三頁 参照)「二誤」については不明である。

十三 多宝本願聞名利益誤(多宝ノ本願ハ聞名利益トスル誤)

晋訳について見るに、多宝如來の本願として、釈迦仏は大弁菩薩(什訳の大樂說菩薩)に次のように告げられている。
今見能仁如來正覺。本行學道為菩薩時。用衆生故不愔（愔）身命。精進不懈權方便。布施持戒忍辱精進一心智慧。求頭

与頭。求眼与眼。求鼻与鼻。求耳与耳。求手足支体妻子侍従。七宝乘象馬衣裘。国邑墟聚。恣人所求。無所愛惜。自致得仏。(大正・九・一〇三・七)

右が多宝如来の本願であるが、什訳には見られない。(『写本』第七卷 四頁 参照) 多宝如来及び多宝塔の出現については

什 訳

晋 訳

大乗説。今多宝如来塔。^(イナシ)聞説法華経故。従地踊出。讚言善哉善哉。

仏告大弁。今者多宝如来至真。在斯塔寺。遙聞説此正法華典。是以踊出。讚言善哉。

(『写本』第七卷 五頁 参照)

とあって、両者はほぼ同一であるから、多宝仏の本願とする処は最初に掲げた即ち什訳には見られない部分を指しているであろう。

十四 以提婆品入宝塔品誤 (提婆品ヲ以ツテ宝塔品ニ入ルノ誤)

これについては、前述したので、繰返さない。

十五 安楽行品四安楽行闕誤 (安楽行品ニ四安楽行ヲ闕クノ誤)

四安楽行とは身・口・意・誓願の四安楽行を指す。什訳にはいうまでもないが、晋訳にも古拙ながらこの四安楽行が述べられているので、両経を比較した(『写本』第八卷 一頁—十三頁 参照) だけでは、聖意の存する処が測

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華経(若杉)

られない。後賢を期する所以である。

十六 法師品有二誤。眼千二 八百 余五千二誤 (法師品ニニツノ誤リアリ。眼ハ千二 八百。余ノ五ハ千二ノ

誤リナリ)

兩訳を対照して六根の功德を挙げれば次の通りである。晋訳の数は総列、括弧内は別列の数である。

什訳	晋訳
1 眼 八百	八百
2 耳 千二百	千二百
3 鼻 八百	千二百(八百)
4 舌 千二百	千二百
5 身 八百	千二百(八百)
6 意 千二百	千二百

(『写本』第十卷 一頁—十二頁 参照)

晋訳によれば、眼根の功德の数を八百、他の五根はすべて千二百(但し総列)とし、什訳では眼・鼻・身根の功德の数は八百、耳・舌・意根の功德の数を千二百としている。晋訳において、別列の数をとれば什訳と同じ数になる。

宗祖が「眼千二」といわれたのは眼根の功德の数を千二百と見られたのであるうか。とすれば宗祖の読まれた晋訳は大正藏経本とは異った經典ということになる。また「余、五ハ千二百」といわれたのは総列における数のみの比較であらう。

十七 促経功用三十三天誤（経ノ功用ヲ促クシテ三十三天トスル誤）

什訳は『法華経』を受持・読・誦・解説・書写する功德によって、肉眼による所見の範圍を「下至阿鼻地獄・上至有頂。」とするが、晋訳は「三十三天」とする。即ち什訳によれば、上は色究竟天・或は無色界の悲想非非想処にまで及ぶが、晋訳では六欲天の第二・忉利天までであつて、両訳を比較してみると、功德の及ぶ範圍に遠近の差があることは明瞭であり、この点について、宗祖は晋訳を誤りとされたものであらう。（『写本』第十卷 一頁 参照）

十八 不輕生報闕日月灯明（不輕ノ生報ニ日月灯明ヲ闕ク）

両訳を対照してみると

什 訳

命終之後。得值二千億仏。皆号日月灯明。於其法中。

説是法華経。

晋 訳

時彼大士寿没之後。便值二百千億如来正真。此諸世尊皆為講説正法華経。

（『写本』第十卷 十六頁 参照）

となる。什訳は「日月灯明」と固有名詞を挙げているが、晋訳はただ「如来正真」といって固有名詞を挙げていない。これを宗祖は「日月灯明ヲ闕ク」と述べられたものであらう。

十九 神力品中惣一種。別出九種誤（神力品ニ惣ニテハ一種、別シテハ九種ヲ出ス誤）

如来の神力について、什訳は長行に十種、晋訳は五種を出す等の相違が見られるが、聖文には合致しない。その他

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華経（若杉）

あれこれと考えても充分には理解し難い。宗祖のご所覽本は現行の晋訳と異ったものであろうか。別の機会に改めて考究してみたい。

二十 薬王品有二誤。定力缺身不言燒臂誤（薬王品ニニツノ誤リアリ。定力モテ身ヲ缺キ、臂ヲ燒クヲ言ハザル誤リ）

これは什訳では「然ニ（燃）百福莊嚴臂」の言があるが、晋訳には見られないことを指すのであろうか。（『写本』第十一卷 十一頁 参照）

二十一 十誤譬喩一闕不具誤。（十誤「恐らくは喩の誤り」ノ譬喩ノ一ヲ闕キテ具セザル誤リ）
什訳によれば『法華經』の諸經中において、第一・最上等であることを示すに十喩を以ってしているが、この十喩中の第五喩の

又如諸小王中。転輪聖最為第一。此經亦復如是。於衆經中。最為其尊。

（『写本』第十一卷 十三頁 参照）

に相当する經文が、晋訳に見当たらないことを指したものであろう。

二十二 妙音有二誤。妙音師弟長短不准誤（妙音ニニツノ誤リアリ。妙音ノ師弟長短准セザル誤）

「妙音品」における身長について

什 訳

而汝身四万二千由旬。我身六百八十万由旬。

又卿本体高四万二千踰旬。而我現身八万四千踰旬。

（『写本』第十一卷 十八頁 参照）

とある。即ち浄華宿王智仏の身長は什訳では「六百八十万由旬」であるが、晋訳では「八万四千由旬」であり、妙音菩薩の身長は両訳とも「四万二千由旬」であって同じである。弟子たる妙音菩薩の身長は両訳とも一致しているのに、師たる浄華宿王智仏の身長は一致していないので、この点を宗祖は「不准」と述べられたのであろう。

二十三 三十四身多有欠減誤。（三十四身多ク欠減アル誤リ）

妙音菩薩（妙吼菩薩）の变化身について比較するに（但し観音品に順じて整理する）

什 訳

A 聖身……………四

1 仏形

2 菩薩形

3 辟支仏形

4 声聞形

B 天身……………六

1 梵王身

2 帝釈身

晋 訳

……………四

仏色像

菩薩身

縁覚

声聞

……………五

梵天

天帝

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華経（若杉）

西安草堂寺奉安の羅什像の原面と注法華經(若杉)

3 自在天身

4 大自在天身

5 天大將軍身

6 毘沙聞身

C 人身……………六

1 轉輪聖王身

2 小王身

3 長者身

4 居士身

5 宰官身

6 婆羅門身

D 四衆身……………四

1 比丘身

2 比丘尼身

3 優婆塞身

4 優婆夷身

E 婦女身……………四

1 長者婦女身

尊豪

將軍

息意天王(?)

……………六

轉輪聖王

散小王

長者

尊者

梵志・沙門(?)

……………四

比丘

比丘尼

清信士

清信女

……………四

長者婦人

2 居士婦女身

3 宰官婦女身

4 婆羅門婦女身

F 童子身……二

1 童男身

2 童女身

G 八部身……八

1 天身

2 龍身

3 夜叉身

4 乾闥婆身

5 阿修羅身

6 迦樓羅身

7 緊那羅身

8 摩睺羅伽身

H その他

於王後宮變為女身

宮人(？)

嫖女・貪賤女

……………二

▽男女大小

……………四？

阿須倫

迦留羅

真陀羅

摩休勒(人非人)

入中官化皇后形

(『写本』第十一卷 二十二頁 参照)

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經(若杉)

となる。Hのその他を除いて計えるに、什訳は三十四身を挙げ、晋訳は二十九身(人非人を除く)を挙げている。宗祖が「多有缺減」と言われたのは両訳を対照するに出没ただならぬ状態を指したものであろう。

二十四 観音品三十三身多闕不満訳(観音品ノ三十三身多ク闕キテ満タザル誤リ)

観世音菩薩(光世音菩薩)の変化身について両訳を比較すると

什 訳

A 聖身……………三

1 仏身

2 辟支仏身

3 声聞身

B 天身……………六

1 梵天身

2 帝釈身

3 自在天身

4 大自在天身

5 天大将軍身

6 毗沙門身

晋 訳

……………四

仏身

菩薩形像

縁覚

声聞

……………三

梵天像(イなし)

天帝像

將軍像

C 人身……………五

1 小王身

2 長者身

3 居士身

4 宰官身

5 婆羅門身

D 四衆身……………四

1 比丘身

2 比丘尼身

3 優婆塞身

4 優婆夷身

E 婦女身……………四

1 長者婦女身

2 居士婦女身

3 宰官婦女身

4 婆羅門婦女身

F 童子身……………二

1 童男身

……………一

梵志像

沙門像

……………一

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經(若杉)

2 童女身

G 八部身……八

1 天

2 龍

3 夜叉

4 乾闥婆

5 阿修羅

6 迦楼羅

7 緊那羅

8 摩睺羅伽(人非人)

H 金剛身……一

1 執金剛身

I その他

……………一

撻查和像

……………一

金剛神

……………九

鬼神像

天尊像

大神妙天像

転輪聖王

殊特像

反足羅刹像

隠士

独処仙人

僮儒像

(『写本』第十二卷 四頁 参照)

となる。即ち什訳では三十三身を挙げるに、晋訳は二十身である。什訳の童男・童女身は晋訳の僮儒像に対応するかも知れないが、強いて対応を求めなければ、前掲の如く、その対応の多くは甚だ求め難いのである。この点を宗祖は「三十三身多闕不満」と述べられたのであろう。

四

以上、晋訳と什訳を比較対照してみたが、『添品法華経』の序にいわれているように、晋訳と什訳の梵本はその伝流を異にしたものであろう。随って、什訳を主として晋訳と比較し、直ちに晋訳を誤りと極めつける訳にはいかないであろう。現代の比較文献学の立場は伝流を異にした梵本を検討する立場において成立する。しかし、宗祖は 釈尊——天台——伝教 という外相承を主張せられ、天台教学にその教学の基盤を置かれたから、当然、什訳に拠られたのである。什訳の立場から晋訳を批判されたのもここにその根拠がある。これを文献学立場から云々することは当を得ているとはいえないのである。又、宗祖は晋訳に対し、「二十二誤」を指摘されておられるが、その一一については、前述したように、什訳に対し、晋訳の増補、或は闕落、或は数字等の相違が見られる。ここに宗祖の『妙法華経』

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華経(若杉)

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

に対する信頼の程が窺われるのである。我々が亦『注法華經』を草堂寺に奉安したのもそこにその意図があるのである。宗祖の指摘された「二十二誤」について、二・三究明しきれなかつた処もあるが、これは後日の研究に俟つとして、一応これにて擱筆する。